

3) 歯周病原因菌を探る —多数解析事例からの検討—

¹ 東邦大学医学部看護学科 感染制御学○小林 寅喆¹

歯周病は歯周組織に発生する疾患の総称で、主に炎症を伴う慢性疾患のひとつとされている。歯周病の進行要因としては喫煙、ストレス、食習慣さらには全身性疾患などが関係していると言われ、特に糖尿病は密接な関連があるとされている。その理由として好中球の機能異常による易感染性、歯周組織の免疫低下などがあげられている。また、炎症組織においては様々な炎症関連物質や炎症性サイトカインが持続的に産生され、その影響が血行性に波及していると考えられ、歯周病と全身性疾患は双方向的に関与していると推察されている。一方、歯周病は歯周組織における口腔内細菌の定着、増殖による炎症の持続と進行、すなわち感染症のひとつとして認識されている。しかし、先にも述べたとおり全身性疾患との密接な関連性が指摘されていることから単純な感染症とは断定されていない。細菌による感染が歯周病の増悪に関与していることは明確であるものの、起炎菌については口腔連鎖球菌をはじめ、嫌気性菌、真菌、スピロヘーター、ウイルスまで多くの説があり特定されるまでに至ってはいない。このことから歯周病は微生物が増悪要因のひとつとして関係しているものの宿主の状態と複雑に絡みあっている疾患であると推察される。

本テーマでは細菌学的側面から歯周病に関与する細菌種について歯周組織炎を有する多数事例について検討し、主な原因菌の可能性を考察する。対象例数は 537 例(男性 206 例、女性 331 例)、年齢分布は 30 歳未満 23 例、30-50 歳 126 例、50-70 歳 269 例、70 歳以上が 119 例である。検討した患者背景は喫煙、基礎疾患、重症度、急性・慢性期、治療前後などである。その結果、*Peptostreptococcus*, *Streptococcus milleri* group(SMG), *Prevotella* の検出と喫煙、重症度などとの関連が見られ、逆に *Streptococcus mitis* ではいずれの背景とも関連がない、または非喫煙や中軽症との関連が見られた。他の患者背景と検出菌との関連性についても検討し考察する。